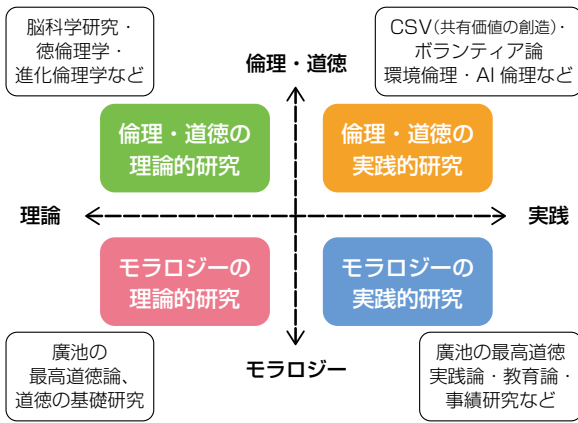




# 研究領域を「見える化」して道德研究の発展をめざす

副センター長・教育研究室室長・教授 宗 中正 (そう なかまさ)

今年度、道德科学研究センターでは、今後の研究活動の方針を共有し、課題を検討するために座標軸を設定し、「研究の四領域」として「見える



化」を試みました。今回は、縦軸に「(一般)倫理・道德研究↑↓モラロジー研究」を、横軸に「理論的研究↑↓実践的研究」を設定しています(図参照)。「モラロジー研究」と、「一般に行われている倫理・道德の研究」が別物なのかどうかについては、読者の皆さんの間でも、異なった考えがあるかもしれません。「モラロジーの研究」の対象は広く、道德の総合的な研究なのだから、一般に行われている道德研究のすべてはモラロジーの研究領域に含まれるものだ」という考え方もあるでしょうし、一方で、「モラロジーは、廣池千九郎博士が独自に体系化した道德研究なのだから、一般の倫理・道德研究の一つとして位置づけるべきだ」という考え方もあるでしょう。

本来、道德の研究は、他のすべての研究と同様、真理を探究する営みですから、モラロジー研究も、一般の倫理・道德研究も、互いに開かれているべきものだと言えるでしょう。

今回の図では、あえて両者の領域を分けて示しましたが、これは、廣池千九郎が体系化し提示したモラロジーの研究と、近年、特に大きく発展してきている現代の倫理・道德の研究とが対話・協働して、人間の安心・平和・幸福を確実に増進する道德を目指す、その出発点を示したものであると考えていただければと思います。

今回作成した図をもとに、①各研究員が研究センターで果たすべき役割が明確になり、②それぞれの得意分野や特性を生かしながら道徳研全

体として発展し、③共同研究やプロジェクトが積極的に展開され、④教育部門との連携・協働が進み、⑤対外的な活動や発信の充実につながるよう、進めていきたいと考えています。

廣池千九郎の先見性の一つは、従来の科学的研究がその客観性や論理性のために排除しがちであった、人間の精神の複雑性、人間存在の不条理性、神や信仰の位置づけや意味(学習指導要領でいえば「人間の力を超えたものに対する畏敬の念」などの問題を重視し、研究領域として位置づけたこととです。この点については、特に横軸で示された、理論的研究と実践的研究が連携し、更に教育現場や個人の実践との協働を通じて取り組むべき、重要な領域だと考えています。